様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：挑戦的萌芽
研究期間：2011～2012
課題番号：２３６５３１９４
研究課題名（和文）　擬態語による性格記述に関する個人的・社会的要因の検討

研究課題名（英文）　Research of personal and social factors related to personality descriptions using “Gitai-go”

研究代表者　向山　泰代（MUKOYAMA YASUYO）
京都ノートルダム女子大学・心理学部・教授
研究者番号：８０３１９４７５

研究成果の概要（和文）：大学生を対象として、「擬態語性格尺度（小松他, 2012)」による調査や半構造化面接を実施し、親密な同性友人間における性格の自己評定と他者評定の差異や関連を検討した。その結果、“他者をポジティブに自己をネガティブに捉える”、すなわち自分より友人の「几帳面さ」「淡白さ」を高く、友人より自分の「臆病さ」「緩やかさ」「不機嫌さ」「軽薄さ」を高く評定する傾向がみられた。その他、性格と親密な同性友人間の関係性について検討した結果、“友人が自分をリードしている”と認知する者は、友人を「几帳面」「淡白」に、自分を「緩やか」「臆病」に評定するなどの知見が得られた。

研究成果の概要（英文）：We conducted research using “Gitaigo Personality Scale (Komatsu et al., 2012)” and semi-structured interviews to undergraduate students in order to examine the difference and correlation between their own personality ratings and their ratings of (same-sex) friends. We found the trend of “they view others more positively but themself more negatively,” by rating their friends higher in “Preciseness” and “Candidness” than themselves, but lower in “Slowness,” “Cowardliness,” “Irritableness,” and “Frivolousness.” We also found that the students who consider “their friends always leading them in their relationship” rate the personality of their friends higher in “Preciseness” and “Candidness,” and their own personality higher in “Cowardliness” and “Slowness.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：パーソナリティ、擬態語、性格尺度、社会的相互作用、gitaigo、mimetic words、personality measures

１．研究開始当初の背景

(1)全体構想

“さっぱりした人”“ほんわかした人”など、日本語の性格表現には多くの擬態語が含まれており、日常会話でも頻繁に使用されている。このことは、我々の日常のコミュニケーション場面において、擬態語で表現することによって的確に記述したり、伝達したりできる性格の側面があることを示唆している。すなわち、擬態語による性格表現に着目し、その使用を支える背景（要因）を知ることは、日本の文化や社会の特徴を反映した対人認知の在り方やコミュニケーションの特徴を知ることにも繋がると考えられる。

本研究では、筆者らの研究グループが作成

した「擬態語性格尺度」（西岡・酒井・向山・小松，2007；小松・西岡・酒井・向山・稲盛，2009；小松・酒井・西岡・向山，2012）を用いて自己および他者の性格を測定するとともに、質問紙調査や面接によって個人的要因（価値志向性など）や社会的要因（他者との関係性など）に関するデータを収集し、これらの関連について検討する。その結果をもとに、擬態語による性格表現がどのような認知的枠組みのもとで使用され、対人関係の中でどのように機能するのかなど、日常的なコミュニケーションにおける擬態語による性格記述の特徴と機能を、個人的要因と社会的要因から考察することを目指す。

(2)先行研究の状況

日本語には他言語に比べ擬態語が多いとされ、近年、国語学や言語学の領域で注目されている。その一方で、日常生活における擬態語の使用や機能についての心理学的研究は十分ではない。筆者らの研究グループは、これまで擬態語の中でも特に性格を表現する擬態語に着目し、語彙研究（lexical study）の立場から検討を行ってきた。擬態語による性格表現は、感覚的で分かりやすく生き生きとした人物イメージを喚起させる一方で、その意味内容を具体的・分析的に説明することは難しい。しかしながら、このような擬態語による性格表現の特徴が、印象形成や対人関係の中で独自の働きを持つ可能性がある。

Allport & Odbert（1936）をはじめとする語彙研究では、重要な性格特性は必ず自然言語に符号化されているという仮説に基づき、性格記述語の収集・分類することで性格概念の理解を試みる。近年、日本で実施された語彙研究の一つである辻（2001）の研究では、広辞苑（第 5 版）（新村，1998）から性格記述語を抽出し、語を分類・整理することによって日本人の性格の構造の理解と測定を試み、11,145 語からなる性格記述語データベース（第二次データベース）を公表した。

辻（2001）による性格記述語データベースには、多くの擬態語が含まれていることから（向山・伊藤・小松・田中，2002）、筆者らの研究グループは、性格を表現する擬態語の研究が、日本文化の特徴を反映した性格の理解や対人認知過程の理解に繋がるという着想を得て、性格を表現する擬態語の組織的な収集や分析を開始した。小松・西岡・向山・酒井（2004）では、上述の辻（2001）によるデータベースから一定の基準にもとづいて 120 語の擬態語を抽出し、因子分析によって「臆病さ」「緩やかさ」「几帳面さ」「不機嫌さ」「淡白さ」「軽薄さ」の 6 つの擬態語群を見出した。また、この結果を論文にまとめ、公表した（西岡・小松・向山・酒井，2006）。

2006 年～2008 年には科学研究費（萌芽研究 18653070，研究代表：酒井恵子）を得て、西岡他（2006）で見出した 6 擬態語群について、新たに語を追加するなど擬態語リストを整理して尺度構成を試みるとともに、擬態語の利用についての実態調査や擬態語と非擬態語の比較を目的とした実験や調査を行った。ここでの主要な成果が 6 下位尺度×10 語（計 60 語）からなる「擬態語性格尺度」の構成である（Table 1）。「擬態語性格尺度」は、同一の語群で自己と他者の性格を測定でき、クロンバックのα係数も自己評定で.80－.91、他者評定で.77－.91、自己評定の再検査信頼性で r=.73－.86 と、十分な信頼性を備えている（西岡他，2007；小松他，2009）。

その他、これまでの実験や調査から、擬態語の特徴や利用の実態が部分的に明らかになった。例えば、擬態語と非擬態語を比較した実験から、擬態語による性格表現は自己概念や他者概念と密接には結びつきにくく、人の性格への当てはまり方が緩やかであるといった特徴が見いだされ、これがコミュニケーション・ツールとしての擬態語の利点（自我侵襲的でない・否定的内容を穏やかに伝えられるなど）となる可能性が示唆された。

Table 1　擬態語性格尺度（60 項目）

臆病さ	おどおど・びくびく・うじうじ・くよくよ・もじもじ・おろおろする・なよなよ・めそめそ・ぼそぼそと言う・じめじめ
緩やかさ	のほほん・のんびり・ほんわか・おっとり・ふんわり・ぼんやり・まったり・ぼうっとした・ふわふわ・ぼけっとした
几帳面さ	きちっとする・きっちり・きちんとする・ちゃんとした・しっかり・びしっとする・しゃきっとした・きりっとした・がさつ・ちゃらんぽらん
不機嫌さ	いらいら・かっとなる・ぶすっとした・とげとげしい・むすっとした・ぴりぴり・かりかり・がみがみ・ねちこい・ごねる
淡白さ	からっとした・さっぱり・あっさり・さばさば・さらっとした・さらりとした・けろっとした・すかっとした・けろり・すっきり
軽薄さ	きゃあきゃあ言う・べったり・べたべた・でれでれ・ちゃらちゃら・うきうき・にこにこ・にやける・ぺらぺら・けばい

２．研究の目的

(1)「擬態語性格尺度」を用いて性格の自己評定と他者評定データを収集し、自他評定の差異や関連について分析する。これら結果をもとに、自己評定と他者評定にみられる特徴を明らかにする。

(2)質問紙調査や面接によって個人的要因

（価値志向性など）や社会的要因（他者との関係性など）に関するデータを収集し、「擬態語性格尺度」による性格評定との関連について検討する。

(3)「擬態語性格尺度」を広く利用に供するため、尺度構成に関する結果を論文としてまとめ、尺度の短縮版を作成する。

３．研究の方法

(1)擬態語による性格の自己評定と他者評定との差と関連の検討

①尺度構成に用いたデータの分析

尺度構成に用いたデータ（西岡他，2007；小松他，2009）のうち、自己評定と他者評定ともに資料が有効であった 770 名（男子 288 名、女子 482 名）を対象として、「擬態語性格尺度」を構成する 60 語への回答をもとに、性格の自己評定と他者評定の差や関連について検討する。自己評定は調査協力者の自己評定（各語が自分にどの程度あてはまるかの 5 件法）であり、他者評定は調査協力者による友人評定（各語があなたの親友にどの程度当てはまるかの 5 件法）である。この調査では“親友”として、調査協力者が長所も短所もよく知っている、年齢差が 1 歳前後の同性の友人で、高校時代から現在までの間で付き合いのある人、を選んで回答するよう求める。

②親密な同性友人ペアを対象とした分析

大学生の親密な同性友人ペアを対象として「擬態語性格尺度」による調査を実施する。調査では、調査協力者の自己評定、調査協力者による友人評定、友人の自己評定の 3 種の対象について、各語がどの程度当てはまるかを 5 件法で回答を求める。この調査では“友人”として、調査協力者の親しい友人で高校時代から現在までの間のどこかで付き合いのある（あった）人、同年代、同性のよく知っている人物、を選ぶよう求める。345 名の有効資料のうち、3 種の評定がそろっているなど条件に合致した 215 名（男子 23 名、女子 192 名）のデータを分析の対象とする。

(2)擬態語による性格評定と個人的要因・社会的要因の検討

①親密な同性友人ペアにおけるリーダー・フォロワー認知（リーダーシップ）と擬態語による性格評定との関係

上述の(1)の②（親密な同性友人ペアを対象とした調査）での調査協力者は、擬態語性格尺度と併せて調査協力者と友人との関係について 4 つの問いに回答する（親しさ・類似度・相違度・リーダーシップ）。これら 4 問のうち、リーダーシップに関する回答と擬態語性格尺度の評定との関連について検討する。“リーダーシップ”については、調査協力者がこの友人と共に行動する時にどちらがリードすることが多いかを、「あなた・友人・どちらともいえない」から 1 つを選択するよう求める。「擬態語性格尺度」については、3 種の評定データのうち、調査協力者の自己評定および調査協力者による友人評定の 2 種を分析に使用する。

②親密な同性友人ペアにおける擬態語による性格表現に関する半構造化面接

上述の(1)の②（親密な同性友人ペアを対象とした調査）での調査協力者のうち、同意が得られた者（女子 33 名）を対象として、半構造化面接を実施する。面接では、調査協力者による友人評定において、友人の性格によく当てはまる（評定値 5 か 4）と回答した擬態語（項目）を取り上げ、その性格を表す具体的エピソード（例：友人の“おっとり”という特徴を表す具体的なエピソードを教えて下さい）や、その性格に対する意見や感情（例：友人の“おっとり”という面をどう思いますか）、状況（例：友人に“おっとり”と伝えたのはどのような状況でしたか）などを尋ねる。

③擬態語により表現された自己像の場面・対象による変化

現職教員 61 名と教員養成課程の大学生 105 名を対象として、佐久間･無藤（2003）を参考に「友人の前」「教師（教育実習生）として子どもの前に立っているとき」「家族といるとき」の自分の変化を 6 件法で評定するよう求める。また、「擬態語性格尺度」のリスト（小松他，2009）から、語基が共通のものを省略するなどして 30 語を選出し、上記 3 場面の自分自身に当てはまる程度を 5 件法で評定するよう求める。

(3)「擬態語性格尺度」の公表と短縮版作成

①「擬態語性格尺度」の公表

Table 1 で示した「擬態語性格尺度」の尺度構成の過程について論文にまとめ、公表する。論文化にあたっては、尺度構成の結果のみならず、Big Five の考えにもとづく既存の性格尺度である 5 因子性格検査(FFPQ 研究会，2002；以下、FFPQ とする）との関連や、性格の自己評定と他者評定および性別による評定値の差異や関連についての結果も含める。

②「擬態語性格尺度」短縮版の作成

尺度構成に使用したデータ（西岡他，2007；小松他，2009）のうち、自己評定と他者評定ともに資料が有効であった 770 名（男子 288 名、女子 482 名）のデータを用いて、各下位尺度を 5 項目とした短縮版の作成と評価を試

みる。語の選択は、“自己評定データの因子分析結果で因子負荷量が高い語”“同じ語基による語のバリエーションは語基の繰り返しによるもの”“「促音＋り」によるもの”を優先する、という基準で行う。項目間相関が r=.70 以上の組み合わせについては因子負荷量が高い語を選び、各下位尺度から 5 語（項目）ずつを選択する。

４．研究成果

(1)擬態語による性格の自己評定と他者評定との差と関連の検討

①尺度構成に用いたデータの分析

「擬態語性格尺度」の下位尺度ごとに 2（性別）×2（自己・他者評定）の 2 要因分散分析を行った。結果、6 下位尺度の全てで自己・他者評定の主効果が有意であった。「臆病さ」「緩やかさ」「不機嫌さ」「軽薄さ」は自己評定が他者評定よりも高く、「几帳面さ」「淡白さ」は他者評定が自己評定よりも高かった。「几帳面さ」「淡白さ」の語群は、比較的望ましい意味を持つと考えられることから、自分と比べて親しい友人が望ましい性質をより多く持つと評定する傾向が見られた。また、4 つの下位尺度で性別の主効果が有意であり、「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」は女子が男子の評定値よりも高く、「不機嫌さ」は男子が女子の評定値よりも高かった。自他を問わず、評定対象が女性の場合は男性の場合に比べ、「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」の得点が高くなる傾向があった。「几帳面さ」「不機嫌さ」に有意な交互作用がみられ、女子は男子と比較して、自己の「几帳面さ」を低く、親しい友人の「几帳面さ」を高く評定する傾向がみられた。また、女子は男子に比べ、親しい友人を“不機嫌ではない”と評定する傾向があった。自己評定と他者評定の同一の下位尺度間での相関係数は r=.15～r=.41 の値であり、「几帳面さ（r=.15）」は最も低く「淡白さ」「軽薄さ」は r=.35 以上となった。なお、以上の結果は、小松・酒井・西岡・向山（2012）の論文に掲載し、公表した。

②親密な同性友人ペアを対象とした分析

3 種の評定値（調査協力者の自己評定、調査協力者による友人評定、友人の自己評定）について平均値の差の検定を行った。このうち、調査協力者の自己評定と調査協力者による友人の評定の平均値を比較すると、「臆病さ」「緩やかさ」「不機嫌さ」「軽薄さ」では、調査協力者は自分を友人より高く評定していた。一方、「几帳面さ」「淡白さ」では、調査協力者は自分を友人より低く評定していた。このような“他者をポジティブに、自己をネガティブに捉える傾向”は、小松他（2012）においても示されており、親しい友人と自分の性格を評定する場合に、比較的頑健にみられる傾向と考えられる。また、小松他（2012）では検討していない“友人の自己評定”の結果については、調査協力者の自己評定の結果と類似の結果が得られ、性格の自己評定にみられる傾向が確認された。その他、3 種の評定間の相関については、調査協力者による友人評定と友人の自己評定の間で「淡白さ」を除き r=.32～.56 の相関係数が得られた。これより、親しい友人に対する性格の認知（調査協力者による友人評定）と自己評定（友人の自己評定）には一定の関連がみられること、また下位尺度によってその程度が異なることが示唆された（小松・酒井・向山・西岡，2013 発表予定）。

(2)擬態語による性格評定と個人的要因・社会的要因の検討

①同性の親密な友人ペアにおけるリーダー・フォロワー認知（リーダーシップ）と擬態語による性格評定との関係

“リーダーシップ”の問いに対する回答から、調査協力者を「友人がリード」「どちらともいえない」「自分がリード」の 3 群に分類し、調査協力者による性格の自己評定と他者評定の平均値を下位尺度ごとに求めた。分散分析の結果、「臆病さ」「緩やかさ」「不機嫌さ」では自分を友人よりも高く、「几帳面さ」「淡白さ」では友人を自分よりも高く評定する、評定対象（自己・他者）別の主効果が有意となった。「軽薄さ」では、有意な主効果はみられなかったが、他 5 下位尺度では小松他（2012）や小松他（2013 発表予定）でみられた“他者をポジティブに、自己をネガティブに捉える傾向”が、本調査でも確認された。また、「臆病さ」「不機嫌さ」「淡白さ」ではリーダーシップの主効果が有意であった。さらに、「臆病さ」「緩やかさ」「几帳面さ」「淡白さ」では有意な交互作用がみられたが、「臆病さ」は主効果、交互作用とも有意ではなかった。結果のうち、特に交互作用に注目すると、「友人がリード」群では、自分は「臆病」「緩やか」である一方、友人は「几帳面」「淡白」であると認知する傾向がみられた。一方、「自分がリード」群では、友人は「緩やか」であると認知される傾向があり、友人間でのリーダーシップの認知と性格との結びつきが示唆された（小松・向山・西岡・酒井，2013 発表予定）。

②親密な同性友人ペアにおける擬態語による性格表現に関する半構造化面接

性格のペア評定への参加者のうち、半構造化面接に参加した 33 名について、面接での応答を逐語記録の形で文字データに変換した。また、「擬態語性格尺度」の 6 下位尺度別に、逐語データの分類・整理を行った。そ

の上で、3 種の評定値（調査協力者の自己評定、調査協力者による友人評定、友人の自己評定）と面接での逐語データの内容との対応づけを行った。現在、擬態語による性格表現が使用される場面や状況、友人間の関係性やそれぞれの性格等に着目しながら、擬態語による性格表現が親密な対人関係の中でどのように使用され、機能しているのかについて質的検討を進めている。

③擬態語により表現された自己像の場面・対象による変化

3 つの場面（友人・子ども・家族）の間の相関係数は、教員・学生とも「几帳面さ」の子ども―家族間が最も低かった。相関の最高値は、教員で「臆病さ」の友人―子ども間（r=.82）、学生で「淡白さ」の子ども―家族間（r=.65）であった。職業（教員･学生）×場面（友人・子ども・家族）について 6 語群の得点を比較した。分散分析の結果、職業の主効果は「臆病さ」のみ有意であったが、場面の主効果は「淡白さ」を除く 5 尺度で有意であった。また、「緩やかさ」を除く 5 尺度で交互作用がみられた。特に「几帳面さ」は、教員・学生とも家族・子どもの前で大きく平均が異なった。交互作用の状況は尺度ごとに異なっており、例えば子どもの前では「不機嫌さ」「淡白さ」は学生より教員の方が高く、「臆病さ」「軽薄さ」は学生より教員の方が低かった。この他、家族の前では「軽薄さ」「几帳面さ」は学生より教員の方が高かった。相関および分散分析の結果から、教員・学生とも、「几帳面さ」の場面による自己像の変化、特に子どもの前とそれ以外との差が大きいことが示された。一方、場面間の自己像の変化が小さいのは「淡白さ」であった(小松, 2011)。なお、小松（2013）では、以上の結果を紹介しつつ、集団や関係性の中で児童の性格がどのように擬態語で表現され機能しているかを、特に情動との関連から考察した。

(3)「擬態語性格尺度」の公表と短縮版作成

①「擬態語性格尺度」の公表

「擬態語性格尺度」の尺度構成の過程とともに、Big Five との関連を FFPQ との相関によって検討した結果や、擬態語による性格の自己評定と他者評定の差と関連を検討した結果を論文として公表した(小松他, 2012)。FFPQ との関連では、Big Five との関連が相対的に強い下位尺度（情動性と「臆病さ」「不機嫌さ」、統制性と「几帳面さ」）と、関連が相対的に弱く、独自の意味内容を持つと考えられる下位尺度（「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」）が見出された（向山・西岡・小松・酒井, 2011)。擬態語による性格の自己評定と他者評定の差や関連についての結果は、本報告書の４の(1)で述べたとおりである。

②「擬態語性格尺度」短縮版の作成

60 項目のオリジナル版から選択した 30 項目について、小松他（2012）と同じ 6 因子を指定して因子分析を試み、自己評定・他者評定とも、小松他（2012）と同様に解釈できる 6 因子解を得た。因子間相関は小松他（2012）の値の±.15 の範囲であり、オリジナル版に準じた因子解が得られた。各因子に負荷が高い項目を合算して下位尺度を構成したところ、クロンバックのα係数は、自己評定で.69－.88、他者評定で.63－.88、自己評定の再検査信頼性で r=.69－.83 となり、使用に十分な値を得た(小松･向山･酒井･西岡, 2012)。性差および自己評定・他者評定の差を検討したところ、短縮版はオリジナル版とほぼ同様の傾向を示した（酒井・西岡・向山・小松, 2012)。また、短縮版においても、オリジナル版と同様に、Big Five と意味的な重なりの大きい特性（臆病さ・不機嫌さ・几帳面さ）と比較的独自性の強い特性（緩やかさ･淡白さ･軽薄さ）が見いだされた。また、オリジナル版と短縮版の相関係数を比較したところ、FFPQ の特性との相関および超特性との相関のいずれにおいても、±.13 を超える差異は見られなかった(向山・西岡・小松・酒井, 2012)。これより、オリジナル版の特徴や測定内容を反映し、使用に耐え得る短縮版が作成できたと考える（Table 2)。

Table 2　擬態語性格尺度短縮版（30 項目）

臆病さ	おどおど・うじうじ・くよくよ・もじもじ・おろおろする
緩やかさ	のほほん・のんびり・ほんわか・おっとり・ふんわり
几帳面さ	きっちり・ちゃんとした・しっかり・びしっとする・しゃきっとした
不機嫌さ	いらいら・かっとなる・ぶすっとした・とげとげしい・むすっとした
淡白さ	からっとした・さっぱり・あっさり・さばさば・さらっとした
軽薄さ	きゃあきゃあ言う・べたべた・でれでれ・ちゃらちゃら・うきうき

(4)研究成果のまとめと展望

①「擬態語性格尺度」を用いた性格の自己評定と他者評定の結果を比較することにより、“他者をポジティブに、自己をネガティブに捉える”などの、親密な友人間でみられる自己と友人の性格評定の特徴が明らかになった。また、②親密な同性友人ペアを対象とした調査から、“友人が自分をリードしている”と認知する者は、自分は「緩やか」「臆病」で、友人は「几帳面」「淡白」と評定するなどの結果が得られ、親密な友人間での関係性の認知と性格との関連が示された。また、調査協力者による友人評定と友人の自己評

定との間に一定以上の相関関係が得られたことから、親密な友人間では相手の性格について一定の認知が成立していることが示唆された。加えて、③60 項目の「擬態語性格尺度」の構成を論文として公表し、30 項目の短縮版を作成したことによって、性格研究の分野に新しい測定ツールを提供できたと考える。例えば、複数の他者を評定する場合や自己評定を他の尺度と共に実施する場合には、より簡便な短縮版を使用するなど、研究の目的や対象者等に応じて短縮版とオリジナル版を使い分けるといった活用が期待される。

以上の結果は、自己と他者の性格を共通の項目で測定できる新しい「擬態語性格尺度」を作成し、使用することによって得られたものであり、擬態語による性格表現の特徴や機能について示唆に富むものと考える。今後は、親密な同性友人ペアを対象とした半構造化面接で得たデータと「擬態語性格尺度」で測定された性格評定の結果を対応させながら、擬態語による性格表現についての質的分析を進めることが課題となる。また、本研究では性格に関わる個人的要因として価値志向性に着目し、「擬態語性格尺度」の自己評定と併せて価値志向性尺度（酒井・山口・久野,1998）を実施している。今後は収集したこれらデータについての分析を進め、個々人の価値志向性と性格との関連について検討してゆく。また、本研究で得られた知見をもとに、日常的なコミュニケーションにおける擬態語による性格記述の特徴と機能についての考察を発展させ、理論的な整理を進める。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
小松孝至・酒井恵子・西岡美和・向山泰代　自他の性格評定に使用可能な擬態語性格尺度の構成　心理学研究　第 83 巻第 2 号　82-90 頁　2012 年　（査読有り）
http://dx.doi.org/10.4992/jjpsy.83.82

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy/83/2/83_82/_article/-char/ja/

〔学会発表〕（計８件）
①小松孝至・向山泰代・西岡美和・酒井恵子　親密な友人関係における性格の認知（２）―友人関係におけるリーダー・フォロワー認知と擬態語性格尺度による自他評定の関係―　日本心理学会第 77 回大会　2013 年 9 月 19 日～2013 年 9 月 21 日　札幌コンベンションセンター（発表予定）
②小松孝至・酒井恵子・向山泰代・西岡美和　親密な友人関係における性格の認知（１）―擬態語性格尺度を用いた自己・他者の評定の平均と相関―　日本教育心理学会第 55 回総会　2013 年 8 月 17 日～2013 年 8 月 19 日　法政大学（発表予定）
③小松孝至　発達心理学における感情論的転回（Affective Turn）　日本発達心理学会第 24 回大会（自主シンポジウム）　2013 年 3 月 15 日　明治学院大学
④小松孝至・向山泰代・酒井恵子・西岡美和　擬態語性格尺度短縮版の作成（１）　―項目選択と尺度構成―　日本教育心理学会第 54 回総会　2012 年 11 月 23 日　琉球大学
⑤酒井恵子・西岡美和・向山泰代・小松孝至　擬態語性格尺度短縮版の作成（２）　―性差と評定対象（自己－他者）による差―　日本教育心理学会第 54 回総会　2012 年 11 月 23 日　琉球大学
⑥向山泰代・小松孝至・西岡美和・酒井恵子　擬態語性格尺度短縮版の作成（３）　―5 因子性格検査（FFPQ）との相関―　日本教育心理学会第 54 回総会　2012 年 11 月 23 日　琉球大学
⑦向山泰代・西岡美和・小松孝至・酒井恵子　擬態語による性格評定と性格特性との関連－擬態語性格尺度と 5 因子性格検査（FFPQ）との相関―　日本心理学会第 75 回大会　2011 年 9 月 16 日　日本大学
⑧小松孝至　現職教員・教員養成課程学生における関係に応じた自己の変化　－擬態語を用いた評定による検討－　日本教育心理学会第 53 回総会　2011 年 7 月 24 日　北海道立道民活動センター

６．研究組織
(1)研究代表者
向山　泰代（MUKOYAMA YASUYO）
京都ﾉｰﾄﾙﾀﾞﾑ女子大学・心理学部・教授
研究者番号：８０３１９４７５

(2)研究分担者
酒井　恵子（SAKAI KEIKO）
大阪工業大学・工学部・准教授
研究者番号：５０３０６３７０
小松　孝至（KOMATSU KOJI）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３２４８８６

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：